

令和 元年 6 月 11 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04401

研究課題名(和文) 学習者が読み替える「伝統的な言語文化」の神話の指導

研究課題名(英文) Teaching of the "traditional language culture" myth that the learners read independently

研究代表者

小川 雅子 (OGAWA, Masako)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号：40194451

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：平成18年の教育基本法改正の趣旨を受けて平成20年度の小学校学習指導要領から低学年の国語に伝統的な言語文化として神話が加えられた。4社の教科書教材「いなばのしろうさぎ」は、どれも原典(『古事記』)とは異なる一義的な教訓話になっている。実践にも神話というジャンルに即した指導は見られない。そこで原典に即した紙芝居を作って調査したところ、低学年の児童でも原典の内容を把握できることがわかった。神話の多義性・比喩性という特徴を生かして「学習者を主体者とする読みの指導」でなければならぬことと、「原典の内容の尊重」・「日本神話を世界の神話と比較する観点」をふまえた教材化の重要性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

平成20年の学習指導要領から小学校国語に「神話」が加えられたが、戦前の神話教材の問題をふまえた議論の発展がなく現代の国語教育における新たな位置づけが明確でない現状の問題を指摘した。そのため、教科書教材は神話ではなく一義的な教訓譚としての昔話になっている。しかし、伝統的な言語文化としての神話の教材化のためには多義的比喩的な原典を尊重すべきこと、さらに、グローバルな社会を生きる学習者にとっての神話は、世界の神話と比較する観点から異文化理解にも繋がるものでなければならぬことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The Fundamental Law of Education was revised in 2006. Based on this revision, in the 2008 Guidelines for the Course of Study, mythology was added as an instructional item in Japanese for the first and second-graders in elementary schools. Currently, Inaba no Shiro-usagi, which was rewritten for children, is included in four textbooks. Each rewrite conveys a moral message and they are different from the original text in Kojiki. I conducted a survey on elementary children's understanding of mythology acquired from Kojiki. From the survey findings, I utilized the characteristics of the genre of mythology and explained how to create teaching materials and provide instructions that cater for children currently. In addition, I asserted the importance of a perspective comparing Japanese myths with myths of the world.

研究分野：国語教育

キーワード：いなばのしろうさぎ 伝統的な言語文化 神話教材 再話 古事記 世界の神話 神話

1. 研究開始当初の背景

(1) 平成 20 年から小学校学習指導要領(国語)「伝統的な言語文化」(第 1 学年及び第 2 学年)の内容に「神話」が加えられた。しかし、戦後の国語教育には「神話」教材や指導方法をめぐる議論がほとんどない。現行教科書では、「いなばのしろうさぎ」の再話が、5 社のうち 4 社の教科書に掲載されているが、それぞれ異なる作家による独自の内容となっている。我が国の「伝統的な言語文化」として位置づけられた「神話」教材についての議論は十分行われないうまま、原典と異なる内容で児童文学として評価された再話そのまま教材になっている現状がある。

(2) 現行教科書における「いなばのしろうさぎ」の実践報告やモデルとして提案された授業では、他の物語教材と同じように場面や登場人物の心情を想像させる活動が中心である。そこには、神話というジャンルの特性が考えられていない。「いなばのしろうさぎ」を「伝統的な言語文化」として指導する観点と方法が明確になっていない現状がある。

(3) 国語教育における「神話」教材は、戦前の問題を踏まえた発展的な議論がなくあいまいなままの状況が続いている。現代の国語教育の内容として、どのように「神話」教材を位置づけるかについての議論がない状況が問題である。

2. 研究の目的

(1) 先行研究を整理して 4 社の教科書教材「いなばのしろうさぎ」と原典との比較分析を行い、再話教材の実態と課題を明らかにする。さらに、原典の内容を学習者が理解できるかどうか、またどのような感想や疑問をもつかについて調査する。小学校低学年だけでなく、教員志望の大学生も対象に加えて、神話の受容について明らかにする。

(2) 神話教材の指導が他の物語教材と同じように、場面や登場人物の心情を想像させるだけでよいのかどうか、世界の神話と日本の神話を視野に入れて、神話というジャンルの独自性を考え、その観点からの読みの方法について検討する。

(3) 学習指導要領に神話が入ってきたのは、それ以前に改正された教育基本法の影響がある。その理念と、国語教育における戦前の神話の受容の問題を踏まえて、情報化・グローバル化された現代の国語教育に神話の教材化と指導をどのように位置づけるかについて明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 教科書教材「いなばのしろうさぎ」をめぐる先行研究を整理した上で、教科書教材の比較分析と原典との違いについて明らかにする。原典を生かした紙芝居を作って実演して、小学 2 年生の理解度を確かめる。また、教員志望の大学生に対して原典の受容や教科書教材についての調査を行い、神話の教材化の観点と課題を考える。

(2) 神話というジャンルの特性を明らかにして、日本神話を世界の神話との関係の中でとらえなおす。世界の神話との共通点や相違点について考える視点から、グローバルな情報社会における神話教材指導の観点と方法を考える。

4. 研究成果

(1) 教科書教材と原典との比較

学習指導要領における「神話」の位置づけ

平成 18(2006)年、「科学技術の進歩・情報化・国際化、少子高齢化・核家族化、価値観の多様化、社会全体の規範意識の低下」等の課題を抱えた予測不可能な国際社会を生きる教育の新たな方向性を示すために、教育基本法が改正された。その前文には、「公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成」、「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」ことが加えられている。第二条に「教育の目標」が新たに規定され、第五項に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」が加えられた。

教育基本法改正の趣旨を受けて、平成 20 年の学習指導要領(国語)では、「伝統的な言語文化に関する指導の重視」が改訂の要点の一つとなり、小学校 1・2 年生に「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。」と、「神話」が明記された。平成 29 年告示の学習指導要領でも「読み聞かせを聞く」活動を通して「我が国の伝統的な言語文化に親しむ」ことがねらいとなっている。『小学校学習指導要領解説(国語編)』では、出典として「古事記、日本書紀、風土記など」があげられているが、「神話」というジャンルの特性は明確に示されていない。

そこでまず、国語教科書に採用された「いなばのしろうさぎ」の分析と原典である『古事記』との比較を通して、神話の位置づけと教材化の方向性を明らかにした。(以下、再話教材は「いなばのしろうさぎ」とし、『古事記』原文は「稲羽の素兔」とする。)

国定教科書の「いなばのしろうさぎ」

「いなばのしろさぎ」の話は、『古事記』上巻の大国主神話の一部である。その冒頭は、次のようになっている。

故、此の大国主神の兄弟は、八十神坐しき。然れども、皆、国をば大国主神に避りき。避りし所以は、其の八十神、各稲羽の八上比売に婚はむと欲ふ心有りて、共に稲羽に行きし時に、...略...

八十神が稲羽へ行く途中、気多岬で「裸の兎」に出会う。八十神に言われた通りにした裸の兎が、さらに痛みが激しくなって苦しんで泣いているところに、大国主神が通りかかった。大国主神は兎に泣いている訳を聞き、兎はそれまでの経緯を語る、という展開である。

この話は明治36年の第一期国定教科書では『高等小學讀本一』に「因幡の兎」として掲載されている。第二期から第六期までは小学2年生の教材(巻四)である。そこで、戦中の第五期と戦後の第六期の「いなばのしろさぎ」をみると、どちらも大国主神話としてではなく兎が主人公の時系列の話に書き換えられていて、どちらにも政治的な言葉はない。第六期では、「八十神」が神ではなく「みなりのりばなかたがた」と書き換えられている。

一義的な「昔話」に読み替えられた教科書教材

平成23年の教科書から教育出版の福永作品と光村図書の中川作品について分析している谷本由美(2011)は、両社の教材について「神話よりも昔話というジャンルの物語に位置づけて紹介している特徴が指摘できる」と述べて、次のようにまとめている。

(一)福永作品と中川作品では物語の主人公が異なる(オホクニヌシか兎か)が、それは古事記そのものが持つ多義的な構成に由来すると考えられる。(二)「いなばのしろさぎ」を昔話のように導入したり、八十神とオホクニヌシを人間のように性格付けすることによって、読み手はこの作品が神話であるという印象を持ちにくくなっている。(三)両作品とも兎を動物として解釈しているが、古事記の持つ多義性を尊重するならば、兎神としての特徴にも目を向ける必要がある。(四)第三と同様に、和邇の解釈についても、多義的に解釈できるような工夫をするのが良いと思われる。

平成27年の教科書を同じ観点から検討すると4社とも「昔話」としての再話になっている。谷本は、動物譚としての各再話が、神話としての世界観や多義性を失った「一義的な昔話」となっていることについて、「それは政治的な議論を回避するには有効であったが、古事記の持つ多義的で豊かな世界観を失うことになったと言えるだろう。また、神を人間と同じような存在として一義的に理解することが、戦前の国定教科書時代に行われてきた教育と通じている可能性についても考える余地があるだろう。そもそも神話とは多義的であるがゆえに、読み手の視点によっていくつもの物語を読み取ることができるものである。近代において、皇国史観と関連付けて一義的に神話が読み替えられたことも、そのためだと考えられる。神話が時代や文化、社会、人々の価値観に応じて読み替えられていくのなら、私たちは近代に行われた読替を安易に踏襲するのではなく、現代に応じた読み方を検討してみる必要があるのではないかと、述べている。

西郷信綱(1975)も、神話の多義性について、次のように指摘している。

神話は独自の比喩表現であるからその意味は曖昧多義であり、一義化することは難しい。

かんたんに一義化できれば、それはもう神話でないといえなくもないような本質を神話はもっている。

「神話」は、どのような時代のどのような年齢の読者にとっても、主体的に自らの解釈を創造できる比喩性・多義性を持っている。佐佐木隆(2007)は、平安時代以降の説話には、教訓的な文句や仏教色の強い文句で結ばれていることが多いが、「より古い神話・伝説の場合は、そのような思想的なまとめの文句が末尾に付されていることはまずない。」と述べている。

このような神話の本質的な特徴を捨てて、一義的な教訓譚として書き換えられた話は「神話」ではない。そこには、児童が自由に想像し主体的に解釈する余地もない。子ども向けの一般図書という観点からは、作者の一義的解釈による再話には問題はない。しかし、児童の主体的な読みの力を育てる「伝統的な言語文化」の教材としては、再話者による教訓譚ではなく、児童自身が神話の比喩性・多義性という本質に触れ直接読み取るものでなければならない。

ちなみに、子ども向け「稲羽の素兎」のはじまりとされる明治期の「ちりめん本」、JAPANESE FAIRY TALE SERIES では、「神話」ではなく「昔話」として英訳されている。明治時代から「神話」が「昔話」として紹介されてきたことも、教科書教材のあり方に影響していると考えられる。問題は、このようなことが教材化の観点から議論されてこなかったことにある。

原典(『古事記』)の文脈と再話の構成

「稲羽の素兎」は、大国主神話の一部で、大国主神が国を治めることになった理由が稲羽の素兎の後も続いている。そこには、次のような話がある。

怒った八十神の謀によって、焼き石を抱きとめたことにより大国主神は死ぬ。

母の願いがきかれ、キサカイヒメとウムカイヒメの治療によって、大国主神は生き返る。

再び八十神の謀によって、木の割れ目に挟まれて大国主神は死ぬ。

母のミコトが見つけて生き返らせ、オオヤビコノカミのもとに逃がす。

八十神は追いかけて来て、弓に矢をつがえて大国主神の身柄を渡すように迫る。
オオヤビコノカミは、根堅州国のスサノオノミコトのもとに逃がす。
根堅州国では蛇の部屋に入れられるが、スセリビメからもらったひれで難を逃れる。
次の夜は百足と蜂の部屋に入れられるが、スセリビメからもらったひれで難を逃れる。
スサノオノミコトの命で荒れ野に入った時、火に囲まれ逃げ場を失うが、鼠に助けられる。
大国主神は、スセリビメを背負って根堅州国から逃げ帰る。

ここで、冒頭の「避りし所以」を語り終えたことになる。

しかし、再話教材には、次のような結びの文がある。

- ・それからというもの、「オオクニヌシこそ、八十人の兄弟の中でいちばんすぐれた方だ。」と、世につたわるようになりました。
- ・かしこくて、心のやさしいおおくにぬしのみことは、この国をよくおさめて、人びとのくらしは少しずつゆたかになっていきました。

これらの末文は、その後の様々な受難をすべて省略して、大国主神を讃えていることになる。それは『古事記』の文脈とは大きく異なっている。そもそも『古事記』には大国主神を讃える言葉はない。

再話は、辻褃の合わない過去の神話を、時代の価値観や思想に合うように再創造されている。「欺した兎が神になる」という日本神話の独自の内容は、現代の思想や価値観とは整合性がとれないので、どの再話でも切り捨てられている。辻褃の合わないことを切り捨てて現代の価値観に合うように書き換えられた話は、もはや「伝統的な言語文化」としての神話ではない。

(2) 学習者による原典の受容

小学2年生への調査

原典の内容が児童にどのように受容されるのかを調べるために、紙芝居を作成して実演した。

- ・調査日：2017年9月21日(木)10:55~11:40
- ・対象：山形市内の小学2年生 33名。1学期に光村図書の「いなばの白うさぎ」の読み聞かせを聞いている。
- ・時間：挨拶 5分。紙芝居実演 20分。調査用紙記入 20分。
- ・紙芝居：大国主神話 絵 16枚

結果と考察

- ・この話を知っていたかどうかについては、「とちゅうまで(授業で習った部分)知っていた」が27名。「全部知っていた」(4名)、「知らなかった」(2名)であった。「ぜんぶ知っていた」2名は、「まんがで読んだ」、「読み聞かせをしてもらった」である。
- ・紙芝居の感想(自由記述)の一部
「おおくにぬしがけっこんあいてになつてすごいなあと思いました。」、「うそつきのきょうだいが、おおくにぬしにひをつけてやけ死んでしまった。おおくにぬしがやさしいところをもっていたので神さまがたすけるところがよかったと思いました。」、「大くにぬしは、やさしくてほかのかみにだまされたことがあったけど大くにぬしはつよくてとてもやさしい人です。」、「火じになった時にたすかってよかったです。なぜかという、おおくにぬしのかみさまがやさしいからです。ねずみがとてもやさしいなあと思いました。」、「こんどはつよい ころも、やさしいころもあってまえよりもっとすごくなったと思います。
このような児童の記述から、原典の内容を概ね理解できていることがわかる。荒れ野に火をつけられた時に鼠が話しかけた言葉を「暗号」と解釈している児童のように、それぞれ自分なりのイメージでとらえている。

- ・紙芝居で、分からなかったこと(「やけ死んだ大国主が生き返る」「兎の毛が元に戻る」)や、疑問点(「なんでにもつをもたせられたのかなーと思いました。」「なんで火じになったとき、ねずみがきゅうにできたのですか。」)は、同じ紙芝居を見た3・4・5年生の記述にも共通していた。

児童の疑問の答えは『古事記』に書かれていないものも多く、児童には疑問を自分なりに想像したり解釈したりする権利が与えられている。児童に内在する言語能力・感受能力は神話の内容を自分なりに解釈している。したがって、一義的な再話を与えるのではなく、「神話」の不思議な展開や比喻に気づかせて様々な想像させ解釈させる経験を与える指導が、伝統的な言語文化に親しむことにつながると考える。

(3) 大学生の解釈

大学生(大学2年生、83名)の原典に対する感想の一部

- ・神芝居というメディアの有効性に関する感想：「半分までめくって絵を見ることができるところが、神芝居のいいところだと感じた」、「絵がリアル」、「想像しやすい」
- ・原典の内容の難しさ：「話の展開とともに大国主神の名前が変わること。」、「話がどんどん複雑になっていくこと」

- ・原典の面白さ：「原文を読むのは大変だけど親しみがもてておもしろい」、「物語の変化が多く、あきない」、「教科書と話が違うことに驚いた」、「教科書で読むよりもわくわくした」、
- ・感想：「何度も災難にあってかわいそう。」、「神の中にもいじわるな神がいることがわかった」、「兎は自業自得」、「妬みと怒りのこわさを知った。」、「一人では生きられないことを実感できた。」、「母の愛は今も変わらないと思った。」、「一目ぼれの感覚が昔の人にもあったのが驚いた。」、「国を治めるには多くの試練を乗り越える必要があるとわかった。」
- ・疑問：「前に結婚したお姫様はどうなったの?」、「なぜスサノまでいじわるをするのか」、「スサノオから逃げたのはなぜか。」
- ・教材性について(問題)：「兄弟を殺すというのは、小学生の教材にふさわしくない」・「内容が残酷」・「すぐによい行いのお返しがないのがもどかしい」
- ・教材価値について：「教訓がある」、「善悪のみで判断しない」、「人の言ったことを鵜呑みにせず行動すべき」、「困難があると解決策が必ずあって、安心する」、「いいことをするといいことがあるとわかる。それだけで終わらない教訓。やさしいだけではだめ、強く」原典の話を知っていたのは少数であった。原典の話から教訓を読み取っている学生も多いが、その内容は多様である。教科書が一義的な教訓話にしていることの問題点が鮮明になる。
- 大学生の「教科書教材」に対する主な感想
- ・教訓性：「やさしさやおもいやりなど道徳心について考えられる。」、「嘘についてはいけないという教訓」、「よいことをすればかえってくる。」、「八十神と対象的に書くことで、どんな人間がいいのかを示している。」、「優しい人になろうという教訓」
- ・わかりやすさ：「話がわかりやすい。」、「優しい人間が理想ということがわかる」
- ・疑問：「登場人物が神である必要があったのか。」、「童話のよう」、「昔話を聞く感覚になる。」、「うさぎはよい奴かわるい奴かの位置づけが難しい」
- ・絵がきれい。

(4) 現職教員による指導のアイデア

神話には神々の事績が書かれているだけで、心理描写はない。そこで、原文には書かれていない登場人物の心情を想像させるという指導が多く考えられている。学習者の発達段階に応じて神話の比喩性に注目する指導も可能になると考える。

- ・すさのおのみことは、強い神か、やさしい神か、討論する。
- ・すさのおのみことは、何を考えていたのかを考える。
- ・リライト：面白さを中心に物語を書く。
- ・続きの物語を考える。続きを書く。
- ・登場人物になりきって自己紹介をする。
- ・登場人物に手紙を書く。
- ・まわりの人を神話の神に例えるとどんな話になるか。
- ・今と昔に通じる考え方を学ぶ。
- ・八十神はどんな反省をしたのか。
- ・外国の話と比べる・イソップ物語やギリシア神話などと比べる。
- ・「神様なのに人間らしいところはどこでしょう」と問う。

(5) まとめ

「神話」の解体とグローバルな視点

「稲羽の素兎」の話が、インドや東南アジアから伝えられた動物譚の影響を受けていることは広く指摘されている。それらの話が伝えられて大国主神話に組み込まれた時、和邇が兎の「衣服を剥ぎ」、兎はその後「兎神になる」という新たな内容が加わった。国語教育における神話教材の検討という立場には、神話学の視点も文学研究の視点も必要であると考えられる。東南アジア系の動物譚が伝播されて、その話が日本神話に組み込まれたことを知ることはグローバルな観点から「我が国の伝統的な言語文化」の裾野を知ることになる。松本直樹(2001)は、世界の神話と日本神話の類似した内容をあげながら、「日本神話を講ずる時、諸外国の神話なども資料として示すことが望まれる。」と述べている。

日本神話を解体して外国の神話と類似した部分等については、古代に生きた人類に共通の思想を理解する手掛かりになる。さらに、様々な話が日本神話の文脈に多様な形で組み込まれて独自の世界観が創造されていることもわかる。グローバルな現代社会を生きる学習者が学ぶ「伝統的な言語文化」としての「神話」は、世界の神話と日本の神話をともに人類の言語文化として捉える視点に立って、位置付けられる必要がある。

神話の比喩性を読む

再話教材は、神話の辻褄の合わない部分を省略したり現代の思想や価値観に合うように書き

換えたりして、動物譚、教訓譚として再創造されている。しかし、『古事記』神話には教訓的な言葉はない。教訓が読み取れるのか、どのような教訓を読み取るのか等は、すべて読者に委ねられている。それゆえ神話は、長い歴史を通して、時代によって人々によって多様に読み替えられてきた。したがって、現代は神話をどう読み替えるか、ということは、児童の主体的な読みに委ねられるべきであると考え。そのためには、神話には「教え」がないこと、神話の比喻から何をどのように読み取るのかは一人一人の児童の主体的な読みに委ねられていることを前提として教材化され指導されなければならない。

児童には、「伝統的な言語文化」としての「神話」を受容する言語能力と感受性が内在している。西郷信綱が「神話は独特な比喻表現である」と述べ、鹿沼茂三郎が『古事記』上巻の構造から「教育の原理」を読み取っているように、神話の実際を知りその比喻性を豊かに読み取ることを前提とした、新たな観点からの教材化と指導の展開が必要である。神話の比喻を豊かに想像する楽しさを体験することが伝統的な言語文化に親しむことになり、やがて思想や価値観の異なる文化の人々を理解し協働して創造的な活動を行う国語力の基礎を育てることにつながる。と考える。

引用文献

- 山口佳紀・神野志隆光、新編日本古典文学全集古事記、小学館、1997、75
海後宗臣、日本教科書体系第8巻、講談社、1964、421-422
海後宗臣、日本教科書体系第9巻、講談社、1964、47-49
谷本由美、2011年度小学校教科書の「いなばのしろうさぎ」 多義性の視点から日本神話再登場のあり方を考える、児童文学研究、44号、2011、17
西郷信綱、古事記注釈第一巻、平凡社、1975、346
佐佐木隆、日本の神話・伝説を読む、岩波新書、2007、23
中野幸一・榎本千香、ちりめん本影印集成日本昔噺輯篇第1冊英語版、勉誠出版、2014、127-128
石澤小枝子、ちりめん本のすべて、三弥井書店、2004、275
松本直樹、神話教材の可能性を考える 神話研究者の立場から -、早稲田大学国語教育研究、21、2001、67
鹿沼茂三郎、地学教育の基本概念について、地学教育、第22巻第6号、1969、129

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

小川雅子、学習指導要領における神話の位置づけと教材化の検討 小学校の国語教材「いなばのしろうさぎ」を中心に、山形大学紀要(教育科学)、第17巻第2号、2019、pp.47-64

小川雅子、言語文化に関する指導の充実、教育科学国語教育、第59巻第6号、2017、pp.68-71

小川雅子、学習者の発達段階に着目した神話教材の開発に関する研究、山形大学教職・教育実践研究、第11号、2016、pp.29-37

6. 研究組織

(1) 研究分担者 無

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：菊池 郁子

ローマ字氏名：(KIKUTI, ikuko)